

しまね読進協 第45号

発行日 平成30年2月20日

発行所 島根県図書館協会読書推進運動協議会部会 (松江市内中原町52番地 島根県立図書館内)

平成二十九年 島根県図書館協会の主な事業

◎読書普及研修会

「図書館空間を演出する
～人と情報をつなぐ空間づくり～」
講師 尼川 ゆら氏
(空間演出コンサルタント)
浜田会場 一月二十九日
松江会場 一月三十日

◎全国優良読書グループの表彰

(公益社団法人・読書推進運動協議会より)
・成人読書むつみ会(松江市)

◎読書推進運動功労者の表彰

(島根県図書館協会より)
【団体】
・おはなしもみの木(松江市)

◎読書体験記の募集

応募数 十五編
入賞 三編

◎「この本いいよー」島根の高校生・高専生

おすすめの一冊「投稿の募集」
応募団体 七学校
応募数 七十二点
※十一月三日～十九日の期間、島根県立

図書館および島根県書店商業組合(今井書店グループセンター店)にて展示をしました。

◎機関誌等の発行・配布

「しまね読進協」第四十五号

松江市立図書館の

読書普及活動について

松江市立中央図書館

松江市では、平成二十年三月に「松江市子ども読書活動推進計画」を策定し、子どもが自主的に読書活動を行っていくための、施策の方向性を定めました。この間、松江市立図書館においては、移動図書館車の巡回や配本サービスによる読書支援、幼稚園、小学校におけるお話し前事業などにより読書普及を行ってきました。計画の策定から五年以上経過したことから、

これまでの成果と課題を検証し、平成二十九年より「第2次松江市子ども読書活動推進計画」がスタートしました。「感性を育てる」「読みのくに」「松江」を計画のテーマとし、子どもの成長段階にあわせて「いっしょに読書」「楽しむ読書」「調べる読書」「考える読書」という四つの読書活動を、一人ひとりが積み上げていき、子どもたちが夢をもち未来を切り拓いていく力を身につけた大人になることを目指します。

松江市立図書館は、子どもたちを地域のさまざまな読書活動とつなぐ役割を担っており、全市にわたる子どもの読書活動を推進していくため、家庭、地域、保育所・幼稚園、学校との連携強化を図っています。その取組の一つとして、平成二十九～三十年度幼児・児童読書普及事業の指定を受け、島根県立図書館読書普及指導員の遠藤雅代さんを講師に迎えて「子育て支援者スキルアップ講座」を行いました。

今年度から松江市立図書館では、松江市乳幼児健診会場での読書普及活動も始めました。これは、月二回実施される四か月児健診の場で、



乳幼児期のふれあいの大切さを保護者へ向けて啓発するものです。図書館司書及びボランティアにより絵本の読み聞かせを行い、リーフレットを使いながら絵本の選び方、読み方のアドバ

イスなども行っています。この活動がきっかけになり、松江市立図書館へ足を運んでくださる親子が増えています。

また、平成二十七年三月より図書館がセレクトした絵本セット「こそだてえんむすびぶっく」の貸出を始めました。年齢別・テーマ別に、五冊の絵本を専用バックの中に入れて貸し出すもので、大変好評を得ています。そこで平成三十年からは、乳児絵本セットを増やし、五歳児くらいからのセットには幼年童話も入れるなど、内容をさらに充実させ貸出を開始します。この絵本セットが、親子の絆を深めるコミュニケーションツールとしてお役に立てればと願っています。



写真左・右より時計回りに「おおいさい ちいさい」(元永定正 さく、福音館書店)、「いないいないばあ」(松谷みよ子 文、潮川康男 絵、童心社)、「したく」(ヘレン・オクセンバリー 作、文化出版局)、「おやすみなさい」(大阪YWCA千里子ども図書館 ぶん、大塚いちお え、福音館書店)、「ママだいすき」(まど・みちお 文、ましませつこ 絵、こくま社)

読書体験記 入賞作品

〈一般の部〉

絵本を通じた自分の夢

岡 優一（出雲市）



『ぼうしとったら』
tupera tupera さく
学研プラス

保育士として地元図書館で絵本の読み聞かせボランティアをしている自分にとって「絵本」は身近な存在である。そんな自分には「絵本を通じた夢」がある。いや正確にはあったと言っべきであろう。なぜならその夢がかなったからである。

その夢は二つ。一つ目は「我が子に絵本を読むこと」。二つ目は「我が子に自分ができる絵本の読み聞かせ会に来てもらうこと」である。

一つ目の夢は待望の娘が生まれた平成二十五年十一月十九日から四日後にかなった。初めて読んだのは知り合いの絵本作家tupera tuperaさんの作品『ぼうしとったら』。病院のベッドにいる娘の横に寝転がりゆっくりと読んだ。生後四日の娘にとっては当然なんのこともわからない。自己満足に過ぎないのだが、一つ目の夢がかなった瞬間であった。

二つ目の夢は平成二十六年四月十二日にかかった。読んだ絵本は『わたしとあそんで』（マリー・ホール・エッツ ぶん/え）『ちいさなねこ』（石井桃子 さく 横内襄 え）の二冊。生後半年の娘はまだ内容がわからずポカンと妻に抱っこされながら自分を

見ていた。家とは違った感じで知らない人に絵本を読んでいる父親の姿はどう映ったのだろう。お話ボランティアの男性メンバーは自分一人。自分にしかできない二つ目の夢がかなった瞬間であった。

保育士もお話ボランティアも十年目を過ぎ、今では娘は二人になった。二十歳の頃からコツコツと集めてきた絵本は現在三百冊程度になり、毎日のように上の子（現在三歳）は「とうちゃん、これ読んで」と絵本を持ってくる。そして下の子（現在一歳）も絵本を持ってきて私の膝に座るようになった。お気に入り絵本も日々を追うことになっていく。絵本を共通の話題とし、子どもと一緒に絵本の登場人物になってごっこあそびをしたり、絵本の中に出てくる言葉を覚えて一緒に言ったりして楽しんでいる。絵本は我が家に欠かせないものとなった。

次の夢は「可能な限り長く絵本と一緒にいること」。この夢は毎日更新されていく。終わりのことを考えると寂しくなるが、絵本を通じた娘たちとの時間をこれからも楽しんでいく。



『わたしとあそんで』
マリー・ホール・エッツ
ぶん/え
よだ・じゅんいち やく
福音館書店



『ちいさなねこ』
石井桃子 さく
横内襄 え
福音館書店

私と父と本の思い出

糸賀 純子（益田市）



『ちいさなうさぎちゃん』
ディック・ブルーナ ぶん/え
いしいももこ やく
福音館書店



『ふしぎなたまご』
ディック・ブルーナ ぶん/え
いしいももこ やく
福音館書店



『青い鳥』
メーテルリンク 原作
高田敏子 文
いわさきちひろ 絵
世界文化社

ディック・ブルーナ作『ふしぎなたまご』。

これが私の心の中にある初めての絵本です。卵から顔を出した生まれたてのアヒルの絵は、今でも鮮明な記憶となって私の中に残っています。

小さい頃から、大好きな父の影響で家にはたくさんの本がありました。だから私の本に関する思い出は、なつかしい父との思い出でもあるのです。

小学生になったばかりの頃、父に連れられて県立図書館に行った時のことです。私は一階で子ども向けの絵本を借り、父は私を待たせておいて二階で自分の読む本を選んでいました。小さかった私は父が階段を昇って二階へ行くのがうらやましく、大きくなった自分も行きたい！と憧れの気持ちで見ているのを思い出します。

家では、父が毎月買ってくれていた「世界の名作」シリーズが届くのが楽しみで、買ってもらうとすく

に読んでいました。特に、いわさきちひろのさし絵のある『青い鳥』が大好きで、何度も繰り返し読んでいました。

中学生になってからは、父の本棚からこっそりと横溝正史シリーズを借りたり、祖父の代から父が大切にしていた岩波文庫を読んだりして、勝手に読んでいたことを叱られたりしながらもたくさん本と友だちになりました。中学生の頃の私は学校で辛いことも多かったので、この頃に読んだ本は様々な場面で私を励ましてくれた本として心に残っています。

大人になってからの私といえば、読書だけではなく様々なことに忙しくなり、図書館へ通う回数も減りました。けれども、母になったことで再び子どもの頃に好きだった絵本と出会うことができ、とてもうれしく思いました。

子どもたちに最初に読んだ絵本は、ディック・ブルーナー作『ちいさなうさぎちゃん』シリーズです。もちろん『ふしぎなたまご』もページが破れるくらいに何度も読みました。

今では子どもたちも大きくなりましたが、自分のお気に入りの絵本を我が子と一緒に読んだ時間は、私にとって宝物のように幸せな時でした。娘たちは今でもミッフィーの大ファンです。

そして子どもたちが成長した今、私はまた少しずつ自分のための本を選んで読む時間をもてるようになってきました。小説やエッセイだけでなく、動物の写真集や児童書など、図書館に行くとき様々なコーナーをまわって本を選ぶのが楽しみです。子どもと同じで好きな本のストーリー展開が気になり、他のことも忘れて一気に読んでしまうのは困りものですが……。

私にとって読書は、自分の生活になくってはならないものの一つです。これからもどんな本に出会えるのか、どんな世界が待っているのか、ワクワクしながら読書をしていきたいと思えます。

〈児童・生徒の部〉

再読の楽しみ

福原 稔 也 (横田高校)



『風の歌を聴け』
村上春樹

村上春樹
講談社



『きみはポラリス』
三浦しをん
新潮社

怠惰な生活に身を埋め、セピア色の毎日になんとか彩りを施そうとする僕にとっては、夏休みの課題の読書感想文は心に留め置くほどのでもないことだった。手に取った本は『風の歌を聴け』(村上春樹著)。この本を読むのはこれで五回目。初読の感想は「よく分からない」の一言。本全体から伝わってくるのは「揺れる海」や「けたるさ」……いわゆる「村上感」に負けてしまった感だ。面白さは欠片も感じられなかった。それが嫌で中学生の僕は四度も読み、線を引き、国語の授業でやっているような分析もした。読了後は日付と自分の理解度まで書いた。だが、結局よく分からなかった。

そして五回目。久しぶりにこの本を読み終えたとき、すっと何かが心に侵入し、今まで見えてなかったものが見えた気がした。

僕は現在、故郷を離れ「しまね留学」で寮生活を送っている。寮に入って僕は心の許容範囲がぐっと広がった気がする。しかし、彩りある日常がセピア

ア色に変わったのは、この寮生活に染められたせいかもしれない。家族以外の人と四六時中顔をつきあわせた暮らし、時に熱くなったり、冷たくなったり……。これまでになく濃い人間関係をなんとかやり過ごしている中で、僕は「けたるさ」を感じ始めていた。そのセピア色の生活の中で、僕は時の流れを全身で感じ、今が過去になっていくことに危機感を痛烈に感じていた。

ああそうか、この本は僕の中にあるような、漠然とした常磐堅磐の日常に対する不安をあぶり出しているのだ。僕はこの本をこんなにもすんなりと受け入れている事実が驚いた。何度読んでもそのことに気づけなかった僕が、気づけるようになっていた。それはきつと、僕の環境や僕自身が変わったからなのだろう。

そこで、思い切って『きみはポラリス』(三浦しをん著)を読み直してみる。中学の頃、この本の感想を熱く語る友人に温度差を感じた本だ。読後、以前には感じられなかった温かい気持ちに僕は包まれていた。人を愛する気持ちはそういう状況にならないと分からないと思うが、そういう感情を想像できたり、心を揺さぶられたりするのは、僕の心が成長している証ではないだろうか。

私たち人間(読み手)の心は、常に変化し、成長している。だから、同じ文章を読んでも以前感じることでできなかったことが感じられるようになるのだ。見えなかった世界が、見えるようになる。日が経てば、心が成長すれば、まるで世界が広がった感じがする。再読の楽しみはそこにあると思う。

読書は深い。読み手自身の変化・成長も教えてくれる。心がどれだけ広く豊かになったかを測るものさしとしての役割もあるのではないかと思う。僕はこれまでいろいろな本を読んできた。その一冊一冊が僕に影響を与え、豊かに成長させてくれたのだ。そして、再読での新たな発見は、心を喜々とさせ、元気を与えてくれるのだ。

平成二十九年 度 読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人読書推進運動協議会から、「成人読書むつまじい会」が全国優良読書グループとして表彰されました。

◆成人読書むつまじい会（松江市）

代表者 原 正治／奈良井 博子

松江市揖屋公民館の学習サークルとして、平成九年四月に設立しました。現在会員は十五名。毎月一回、共通テキストとして借りた本を全員で読み、感想を述べ合い、何がこの本の中心問題なのかを突き止める話し合いが活動の中心です。

昨年度から、九月に東出雲中学校の三年生が二人、社会体験の一環として読書会に参加しています。今後は、子どもたちを対象にした本の読み語りや影絵劇の上演、老健施設での詩の朗読など、本を読む楽しさ、言葉によって紡ぎ出される世界の美しさを、もっと積極的に伝えていきたいと考えています。

島根県図書館協会読書推進運動協議会部会では、読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な団体及び個人を毎年表彰しています。今年は一団体を表彰しました。

【団体】

◆おはなしもみの木（松江市）

代表者 矢田 栄子

平成十七年から現在に至るまで、市内の幼稚園、小学校に出向き、お話（ストーリーテリング）を聞く機会を提供しています。現在会員は十四名です。

子どもたちの想像力を養い、やわらかな心や考える力を育み、情操豊かな子どもたちを育成する事業に携わってきた団体です。

この本いいよ！



島根県図書館協会では、本に対する想いを深め、本に親しむ機会を増やしてもらおうと、平成二十九年から県内の高校生・高専生にお薦めの本を募集しています。

十回目となる今年度は七校から七十三点の応募があり、その中から二十点を、十一月三日から十九日まで、県立図書館で展示しました。また今井書店グループセンター店でも、同じ期間、コーナーを設置して紹介しました。その他、高校図書館や公共図書館でも、自館の展示に活用していただきました。

県立図書館では、展示された本を手に取る姿が見られ、多くの本が貸出中となりました。

ご応募いただいた高校生・高専生のみなさん、ご協力ありがとうございました。



県立図書館での展示



今井書店グループセンター店でも紹介しました

島根の高校生・高専生

おすすめの1冊

投稿作品より

※一部編集して掲載しています



(3年)

『ジブリの仲間たち』

鈴木敏夫 新潮社
今まで語られてこなかったジブリ作品の裏話が数多く書かれているのが、この本の一番の見どころだと思う!! (3年)

『ラプラスの魔女』

東野圭吾 KADOKAWA
ラストは、想像していたものとは全く違いました。最後まで驚かされた作品で、読んでいてとても楽しかったです。(3年)

編集後記

中高生の利用が少ないというのは、多くの図書館の悩みです。毎年刊行される『読書世論調査』（毎日新聞社）の結果を見ると、小学生から中学生、高校生となるに従って不読率（一か月間に一冊も本を読まなかった児童・生徒の割合）が高くなり、高校生は約五十%です。「この本いいよ！」はそんな状況を憂い、十年前に始まりました。今年、島根県書店商業組合の協力を得て書店でも紹介していただき、また市町村でも展示に活用していただいた図書館がありました。本会の事業が中高生の読書促進に少しでも役に立てれば幸いです。（編集員一同）